

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Contrastive Linguistics as a Linguistic Science

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1973-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 道雄, Nakano, Michio メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2272

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



言語科学の一領域としての 対照言語学 (I)

中 野 道 雄

0. 本論文は、近年、対照言語学として発達してきた分野が、科学としての言語学の一領域として存立することの意義を探究しようとする。すでに数度の国際的学会を持ってきたこの分野⁽¹⁾についてそのような探究を行わねばならないのは、それについての疑問がいくつかの視点から提出されているからである。そこで、まず、対照言語学の歴史と現状を概観し、次に、批判の論点を整理し、最後にこの問題について私見を加えることにしたい。

1.0. 周知のとおり、「対照言語学」とは、応用言語学の一分野であり、2箇の言語（たとえば日本語と英語）を比較分析し、それによって得た知見を、外国語教育、機械翻訳、辞書編集などの実際目的に応用せしめることを目的とするとされている。原語は *contrastive linguistics* であるが、これは、従来からあった言語の系統を主たる関心とする「比較言語学」(*comparative linguistics*) と区別するために、対照言語学の研究者の側から用いた名称である⁽²⁾。ここで、*comparative / contrastive* の2語の辞書的意味の違い⁽³⁾が有効に利用されているわけではなく、便宜的な名付けであると言えよう。学史的相違のゆえに、このように区別・対立せしめられた両者は、しかしながら、原理

(1) 1968年、Georgetown 大学における the Nineteenth Round Table Meeting, 1969年、英国の Cambridge における the Second International Conference of Applied Linguistics の1部門, 1971年、Honolulu における the Pacific Conference on Contrastive Linguistics and Language Universals がその主なものである。

(2) Ellis, *Towards a General Comparative Linguistics* (1966), p. 11.

(3) Cf. *Webster's New Dictionary of Synonyms*, s. v. compare, contrast, etc.

的にはそのような関係にあるのではないとして、Ellis は、general comparative linguistics (一般比較言語学) の枠組みを次のように構想した。

- 01 一般的：方法論，相互関係，等
- 02 全目的の比較
- 021 記述的（共時的）
- 0211 個別言語の比較記述言語学
- 0212 言語類型学
- 022 歴史的
- 0221 部分の比較
- 0222 個別的（組織的の反対）
- 0223 歴史の比較
- 0224 変化の類型
- 03 特定の目的による比較
- 031 翻訳の言語理論
- 032 系統的比較言語学
- 033 接触における言語（接触比較言語学）
- 0331 2言語使用の言語理論
- 0332 借入一般
- 0333 地域的近似
- 034 方言学，等

このように、Ellis の枠組みでは、contrastive linguistics の名は無くなり、その実体は、0211その他に分散して位置づけられている。しかし、それにもかかわらず、その後ますます contrastive linguistics の名は定着する傾向にある。⁽⁵⁾一方、comparative linguistics の研究者たちも、あまりこの枠組みに従う

(4) *ibid.*, pp. 13-32.

(5) Cf. 脚注(1)。

というふうでもなく、たとえば、比較的新しく出版された Katičić, *A Contribution to the General Theory of Comparative Linguistics* (1970) でも次のように述べられている。

「系統的 (genetic) アプローチが、言語の比較に対して基盤を供する唯一のものではないが、これまでのところ、言語は、ほとんどこの基盤の上に比較されてきており、しかもめざましい成功をおさめてきたのだ。したがって comparative linguistics の名は、これ以上の限定辞を加えなくても、この著書において、言語学における系統的研究を指すことにする。」(要旨; p. 9)

なお注意すべきことは、contrastive の語を用いるとしても、contrastive analysis (対照分析) としている人も少なくないことである。これは contrastive linguistics の独立性に疑念を抱き、比較ないし対照とは、言語学の一方法の名にすぎないとする立場である。

日本の学界における「対照言語学」「対照分析」「比較言語学」などの用語の使いわけ、および、その定着の過程は、大体、上述の英米における場合に做ったものである。日本では、これらの他に「比較語学」という呼称もあるが、これは、ふつう伝統文法的研究に対して用いられる。⁽⁶⁾

2.0. 所与の二つの言語を比較することは、翻訳、外国語の習得、辞書編集、外国人との接触などに必然的に伴うことがらであり、それに対する系統的なあるいは非系統的な論述は、古くから、多くの言語に関して行なわれてきたところである。しかし、ここで筆者が問題とし、かつ、一般にその名で呼ばれている対照言語学とは、第2次大戦後、米国を中心として、外国語教育に対する応用を主たる関心としつつ、新言語学的方法によって行なわれてきた2言語の比較研究を指しているのである。

2.1. 上述の意味における対照言語学は、その原点を、米国構造言語学

(6) 榎垣実「日英比較語学入門」(1966) pp. 72-7.

の指導者の一人であった C.C. Fries の次のことばに求めるのがふつうである。

「外国語教授というものは、いつも、ある特定の外国語を、ある特定の母国語の背景を持つ学習者に教えることである。⁽⁷⁾」

「[外国語教授のための] もっとも能率的な教材とは、学習されるべき外国語の、学習者の母国語の並行的記述と注意深く比較された記述に基づいたところのものである。⁽⁸⁾」

Fries は、当時、非英語国民に対する英語の教授法の研究を目的として、1941年にミシガン大学に設けられた The English Language Institute の主宰者であった。彼は、伝統的な外国語教授法に対抗して、構造言語学の得た言語に対する知見を外国語教育に応用することによってその革新をはかろうとしたのであった。そしてそれが、限界を見せながらも、相当な程度に意図した革新の成果をおさめたことは周知のとおりである。Fries は、上の引用において、ふつう「ミシガン・メソッド」とか「オーラル・アプローチ」とか呼ばれる教育法の重要な前提として学習者の母国語と、学習すべき外国語の比較分析があることを示唆しているのである。しかも彼が、比較分析を、彼の教授法によく知られた他の特徴に比しても、より重要なものとしていたことは、次の引用によっても知ることができる。

「新教授法の基本的特徴は、より多くの時間を与えることでも、少人数のクラスを作ることでも、さらに口頭練習を強調することでもない——これらは望ましいことがらではあるけれども。外国語の教授法を論じる前に、学習者の、外国語のそれとは異なった母国語の言語習慣を背景としながら、新しい言語習慣を発達せしめようとする努力に関して生じる特別の問題を発見しようとする、さらにはるかに重要な予備的作業がなされなければならない。」

⁽⁹⁾
(要旨)

Fries のこの序文を与えられて、実際に比較分析の手本を示してみせたの

(7) *Teaching and Learning as a Foreign Language* (1957), "Preface."

(8) *ibid.*, p. 9.

(9) C. C. Fries, "Foreword" in Robert Lado, *Linguistics Across Cultures* (1957).

が、Lado であった。Lado によれば、2 言語の比較は、次の 4 部門に分かれて行なわれる。

1. 音組織の比較
2. 文法構造の比較
3. 語彙組織の比較
4. 書記組織の比較

そして外国語教育の性質にかんがみて、

5. 文化の比較

が加えられる。

Lado の示した方法を、文法構造の場合を例にとって見てみよう。

彼は、構造言語学の立場に立って、文法構造とは、ある意味やその関係を伝えるために言語において用いられる組織的な形式上の仕組みであるとする。この仕組みの種類としては、例えば、語順・語尾変化・機能語・音調・強勢⁽¹⁰⁾などがある。これらの仕組みが、所与の 2 言語の一方にあって他方に無かつたり⁽¹¹⁾、それらの意味・関係や分布が異なっていることがある⁽¹²⁾。外国語の学習⁽¹³⁾においては、この異なりのあるところに困難点が多く、無いところに少ない。そこで、これらのしくみごとに、2 言語の異同を記述するならば、教材・テストの作成に欠くべからざる資料となるであろう。これが、Lado が示した仮説である。

このような Fries・Lado の示唆に従って書かれた代表的なモノグラフが、Everett Kleinjans の *A Descriptive-Comparative Study Predicting Interference for Japanese in Learning English Noun-head Modification Patterns* (1958) である。彼は比較する言語として日本語と英語をとりあげ、その目的を次のように規定す

(10) 例えば、英語で、pocket watch という語順は、pocket が watch を修飾する（その逆でない）という意味の関係を伝えている。(Cp. watch pocket)

(11) 例えば、英語の、形容詞の比較変化に対応する文法的仕組みは、日本語にない。

(12) 例えば、疑問文であることは、音調の他に、英語では語順で、日本語では機能語で示される。

(13) 例えば、英語では複数語尾は名詞にのみ表われるが、スペイン語では、冠詞・形容詞・名詞に表われる。e. g. the white dove → the white doves / la paloma blanca → las palomas blancas

る。

- a. 英語のシンタクスの一部と、日本語のその相当部分を比較すること。
- b. 日本人が英語を学習する場合に、このシンタクスのレベルにおいて干渉が生じる個所と生じない個所を予言すること。
- c. この予言に基づいて、標本として抽出されたテスト問題を準備し、この予言を立証するため無作為に抽出された日本人学生にこれらのテストを施行すること。

彼は、日英両言語において、比較の前提となる統語的記述が比較的充実している；シンタクスの重要な部分として、名詞を主要部とする修飾構造をとりあげた。日英両語の差異の総和は、形式・意味・分布の諸要素を変数とする函数としてとらえられる。困難度の大きさは、この差異の大きさに比例する。テストでは、日本語の意味を与えられて、英語の修飾構造の定型を発表すること、およびその逆を求め、その誤答数をもって、困難度を測定する。

結論として、Kleinjans は、仮説が証明されたとし、同時に、彼が対象としてとりあげた名詞を主要部とする修飾構造は、かなり広い統語的分野でもあるので、応用的貢献度も高いとしたのである。

Kleinjans の研究は、先駆的なものでありながら標準的と言える秀れたものであるが、それにも関わらず、同じ方法・目的の研究が多数追随するというようには展開しなかったようである。その理由は、後述の部分で順次明らかになってゆくであろう。

2.2. Washington D. C. の Center for Applied Linguistics は、米国で教えられている五つの主要な外国語、すなわち、フランス語・ドイツ語・スペイン語・ロシア語・イタリア語と英語の対照研究を、1959年に企画した。各外国語ごとに、音声と文法の2冊、計10冊の本にその成果がまとめられるはずで、1962年にその第1冊が出た。1966年に第6冊が出たが、その後は未刊のようである。既刊の内容を検討し、また全冊の刊行が遅延しているのを

見ると、監修者や著者たちの苦渋がありありと感じられる。それは第1には、対照言語学自体の問題としての方法論の模索ということであったが、第2には、応用言語学としての対照言語学によって立つべき言語理論の激しい変革の時期に遭遇したということがあった。このシリーズも最初は構造主義言語学の立場から出発したが、まもなく、変形生成理論の洗礼を受けることを余儀なくされた。既刊の内、もっとも充実した Robert P. Stockwell らの *The Grammatical Structures of English and Spanish* (written in 1962; published in 1965) は、巻頭で、6種類の文法を比較して、対照言語学には、変形生成文法がもっとも適していることを述べ、その方法論によって、英語とスペイン語の文法構造の比較を行なっているのである。

変形生成文法は、周知のとおり、今日の文法理論のうちで、もっとも説得力に富むものであるとされる。その代表者 Noam Chomsky によれば、生成文法と記述文法（構造主義文法もその一つ）は、そのどちらを選ぶかというようなものではなく、前者は後者を包含しているのである。すなわち、記述文法が目的としているような要素の目録などは、生成文法は、必要とあれば、その装置からいつでもとり出せるしくみになっている、としている。⁽¹⁴⁾そして変形生成文法学者は、研究の累積と理論の発展によって、上記の Chomsky の言を裏づけようとしつつある。

対照言語学が、このような強力な言語理論をとりいれようとしたのは当然であるが、そのみならず、変形生成文法は、対照言語学に対して、有力な理論的基礎を与えるとされる。（少なくとも一部の対照言語学者はそのように受けとっている。）

変形生成文法的な対照言語学の論文は少なくないが、如上の論点をもっとも明快にうち出している Robert J. Di Pietro の “Contrastive Analysis and the Notions of Deep and Surface Grammar”⁽¹⁵⁾ をとりあげてみよう。

(14) “The Current scene in Linguistics: Present Directions,” *College English*, May, 1966. (大塚高信編「英語文法論読本」に再録; p. 118)。

(15) In James E. Alatis, ed., *Report of the Nineteenth Annual Round Table Meeting on Linguistics and*

Di Pietro によれば、構造主義文法は普遍文法の考え方を排し、各個別言語の形式を、あくまでそれぞれの構造に基づいて定義しようとした。したがって、対照言語学が必要とする、比較のための 2 言語の共通の基盤が失われることになった。⁽¹⁶⁾ 一方、変形生成文法は、Noam Chomsky の *Cartesian Linguistics* (1966) にも明らかなように、普遍文法、換言すれば、言語の普遍性に大いに関心を払う。そして、変形生成文法は、言語の構造を深層構造と表層構造の二つに分けるが、この深層構造が、2 言語の比較のための基盤になる。つまり、深層構造と言語の普遍的部分とは同じものである。彼の描く言語モデルでは、深層において、意味・文法・音声に関する普遍的な素性が貯えられており、これが諸規則の適用を受けて変形され、表層において、その言語にとって固有な形態をとる。対照言語学は、任意の 2 言語におけるこのプロセスの相違を示すことをその仕事とすることになる。1 例を示すならば、普遍的な意味素性として次のものがある。

human, nonhuman

英語において、meat が動物の肉を、flesh が人間の肉を指しているのは、この素性を（この語彙において）用いているのであり、スペイン語において（日本語の「肉」もそうだが）、carne でどちらの肉をも指すのは、この素性を用いていないのである。したがって、この場合の英語とスペイン語の相違は、この素性の選択のいかんということになる。統語面においては、たとえば、格は、語順・屈折・前（後）置詞などによって標示されるが、表層構造

Language Studies (1968). 以下 Alatis, *Report* と略。なお、Di Pietro は、上記の CAL のシリーズ中「イタリア語・英語」の 2 冊の共著者であり、この分野の数少ない単行本研究書 *Language Structures in Contrast* (1971) の著者である。

(16) 単純な例であるが、

- a. 「人間の手」と「人間の足」
- b. 「人間の手」と「鷹の羽」
- c. 「人間の手」と「鷹の卵」

において、a と b は、比較が可能であるが、c、は不可能、または無意味である。すなわち、比較とは、共通点を含みながら、たがいに異なっている（と思われる）ものを対象とするわけである。なお、構造主義言語学の中にも、言語の普遍性を探究した業績（Di Pietro も言及しているが、）Joseph Greenberg, ed., *Universals of Language* (1963) がある。

のみを分析する文法にあっては、これらが別個にとらえられ、2言語の比較においては、項目別の比較がいたずらに複雑になり、あるいははなすべき比較を見つけえない可能性がある。変形生成文法は、このように、言語間の異なりのレベルづけを明確に示すことによって、対照言語学にそのよって立つべき基盤を与えてくれるのである。以上の Di Pietro の主張には、それなりの疑問があるが、それについては、本論文の後半において検討することにする。

2.3. Noam Chomsky に代表される変形生成文法以外の生成文法の一つ、成層文法 (stratificational grammar) にも、対照言語学に対する関心があり、例えば、Robert L. Snook は “A Stratificational Approach to Contrastive Analysis”⁽¹⁷⁾ において、変形文法の (当面の) 主たる関心は、Chomsky も明言しているように言語能力のモデルであるのに対し、成層文法は、言語能力のモデルと言語運用のモデルを兼ねたものを明らかにする。一方、対照言語学はその応用的性格からして、言語運用モデルを必要とするであろうから、この点で成層文法は変形文法より有効である、としている。⁽¹⁹⁾

その他に、セクター分析と呼ばれる文法理論に基づく研究に Kenneth L. Jackson, *English Middle Adverbs and the Japanese Student* (1967) がある。また、ヨーロッパにも、これまで述べてきた米国系の対照研究の流れとは違った流れがあるようであるが、筆者はまだそれを検討していない。

3.0. 対照言語学に対する批判は、さまざまな観点からなされているが、それを大別すると次の二つになると思われる。

- i) 対照言語学の応用性如何。
- ii) 対照言語学の理論的基盤如何。

(17) In Gerhard Nickel, ed., *Papers in Contrastive Linguistics* (1971). 以下 Nickel, *Papers* と略。

(18) *Aspects of the Theory of Syntax* (1965), p. 9.

(19) Ronald Wardhaugh は、この本の書評 (*Language Learning*, Vol. 21, No. 2) において、まさにこの理由のゆえに、成層文法はたいいてい言語学者に受け入れられないのだと皮肉っている。

i) は、これまで述べてきたように、対照言語学は、主として外国語教育への貢献を目的として発達してきたのであるが、はたしてその効能があるかどうかという疑問である。特に、対照分析によって学習者の困難点・困難度を予測できるという Fries・Lado の仮説に対する疑問である。ii) は、対照言語学においては、比較のための科学的な基盤がないものを比較しているのではないか。仮に、その点で問題がないにしても、対照言語学は、結局のところ、いったい何を明らかにしようとしているのか、といったより根本的な疑問である。以下に、これらを順次検討することにする。

3.1. Fries の外国語教育法は、米本国のみならず、日本の英語教育界にも大きな影響を与えた。それは、わが国の実際的な事情から、ひろく実施されたというにはほど遠かったが、少なくともその理念は教師たちによく理解され支持されたと言えよう。ただ、その理念を形成する幾本かの柱、少人数クラス・話しごとば尊重・パターン・プラクティスと言ったものはそのまま伝えられたが、もう一本の柱、前述のように、Fries 自身、もっとも重要視した対照分析は、ほとんど忘れられたままになった⁽²⁰⁾。そのようになったのには理由がある。Fries の教育法は、外国語を、理解によるよりも、習慣によって習得せしめようとするものであり、それには、母国語を学習環境からなるべく排除しようとするものと理解された。これに対して、対照分析を利用するという事は、母国語の要素を介入せしめることである。このような受け取り方が、日本の英語教育者たちをして、対照分析から遠ざからしめたのであると言えよう。

これに対しては、Fries の教育法の枠の内と外の両方で批判が成立する。Fries が対照分析の活用を説いたのは、教師・テキスト編さん者のレベルの事であって、学習者にこれを行なわせたり、分析結果を直接、知識として

(20) 米国では、Lado のテスト研究・教科書編さんなどがあるが、それでも最初予期されたほどのものではなかった。

与えるのではない。それは主として、教授項目の順序・重点のおきどころと言った形で消化される。現代の言語学は、明確な形ではないが、母国語の学習と外国語の学習は同じものではないと教えている。とすれば、外国語の学習者にとっては、その外国語を母国語とする人のものと同じ言語環境はかえって不自然なものであることになる。ここに、言語教育者の機能する余地があるのである。

一方、対照分析の結果を教室で、直接、知識として教えることも効果があるとする人も決して少なくない。

J. C. Catford は、次のように述べている。

「知性・関心度が高い生徒に対して、対照データを教室で提示することは、生徒が学習上の問題点のあるものを理解し、克服するのを助けることができる。母国語と外国語の間でたがいに類した (similar) ものである深層構造の顕現としての表層構造の生徒に対する説明、あるいは少なくとも明示は、言語学習においては、かなりふつうに行なわれることである。」⁽²¹⁾

また、国広哲弥氏は次のように述べている。

「日英両語比較研究の第1の目的は、学習困難点の予想及び両語の食い違いをまず頭で理解させようとする「理論的学習」に役立てることである。音声面に例をとって言うならば、ただ正しい発音をくり返して、聞かせるだけでは不十分であって、口の構えや音声構造の説明を与えるのが能率的である。日本人の発音では *examination* のような単語の第2アクセントを無視して、その部分を平板に発音し、[イグザミネーション] のようにする傾向が強い。これにはわけがある。日本語の単語はいかに形が長くてもただ1個のアクセント核しかないという特徴があるからである。(中略) この事実をひとこと生徒に説明してやれば、誤りの原因を容易に悟らせることができ、矯正は一段と効果的になるだろう。」⁽²²⁾

(21) "Contrastive Analysis and Language Teaching" in *Alatis, Report*, p. 161.

(22) 「構造的意味論」(1967), p. 3.

このような論者は、特に、幼児でない生徒の外国語学習においては、習慣形成以外に、論理的類推力や認識力による言語能力の形成の力を認め、これを活用しようとするものである。

3.2. しかしながら、外国語学習における母国語の干渉、したがってその研究とその成果の外国語教育への何らかの形での応用を認めるとしてもなお、現在の形の対照言語学に懐疑的な意見は多い。そのことは、この方面の学会発表や論文の少なからぬ部分があるがその応待に追われているようであることから分かることである。この種の意見の論点を Carl James は次のようにまとめている。

「母国語の干渉は、外国語学習における困難点の唯一の原因ではない。対照分析が予測できない他の原因がある。言語学の知識を持たない教師でも対照分析が予測できるより多くの誤りに気づいている。⁽²³⁾」

言いかえると、対照言語学者の言うことは分かるが、実際に彼らが供給してくれる知識は先刻御承知のことが多く、また一般に、それほど決定的な役には立ってくれない、という教育現場からの批判である。

この問題に関して第1に検討しなければならないことは、データの集積度の問題である。いかなる学問分野においても、それが「役に立つ」ためには、一定以上の知見の集積がなければならない。対照言語学の場合は、明らかに集積不足である。⁽²⁴⁾しかし、この点を割引いてもなお、上記の批判は答えられるべきものを残している。

Carl James は、同じ論文で、言語学習における困難度を決定する因子は他にも沢山あるという批判に対して次のように述べている。

(23) "The Exculpation of Contrastive Linguistics" in Nickel, *Papers*, p. 54. なおこの論文は、本論文 (I) の後半部と同じ目的のものである。併読を希望する。

(24) 英語と主要なヨーロッパ諸語の場合はまだしも、先述の CAL のシリーズの他に、いくつかの進行中のプロジェクトがあるようである。(Cf. Nickel, "Contrastive Linguistics and Foreign-language Teaching," in Nickel, *Papers*. 日本語に関しては、これらに匹敵するものは、過去にも現在も見当たらない。

「この批判に答えるもっとも明白な方法は、対照分析は、母国語の干渉が誤りの唯一の原因であると主張したことは決してないということを指摘することである。Lado は次のように言っている。『これらの相違が、外国語学習における困難さの主たる (chief) 原因である』『外国語の型の習得における容易さと困難さを決定するもっとも重要な (the most important) 因子は、外国語の型と母国語の型の相似または相違である。』このような『主たる』とか『もっとも重要な』ということばは、母国語の干渉が唯一の原因であるとは考えていないことを示唆している。」さらに James は、「Lado は『でたらめというよりは大きい頻度で起こるであろうふるまい (behaviour)』を予測する能力以上のものは主張していない」と述べて、オーバー・コミットメントを否定している。

Lado の示唆でさらに重要なものは次のものである。

「外国語と母国語の比較によって得た問題点のリストは、教授・テスト・研究・理解のための非常に重要なリストとなろう。しかし、それは、それを生徒の現実の言語活動に照合することによって最終的な立証がなされるまでは、⁽²⁵⁾ 仮説的な問題点のリストであるとみなされるべきである。」そして、Lado は、⁽²⁶⁾ その理由として、他の因子の存在を指摘している。もっとも、「Lado を読み直せ」という言は、外部の批判者のみならず、対照言語学者自身にも向けられるべきものであろう。この分野の諸文献を検討すれば、Alexander Baird が次のように述べているのは、もっともであると言わざるを得ないようである。「言語学者が、言語教師から、ときどき誤解されたとしても、それは言語学者の責任とは限らない。しかし彼が部分的には責任をおそらく認めるであろう仮説の一つは、学習者の母国語と目標言語の対照研究が、言語教師が彼と彼の生徒が見出す可能性の高い、習得の困難な領域を予測することを可能にするという考え方である」⁽²⁷⁾

(25) Rado, *ibid.*, p. 72.

(26) 個人差・方言差・年齢など。またその外国語の教室外での使用状況も重要な因子である。

(27) "Contrastive Studies and the Language Teacher," *English Language Teaching*, Vol. XXI, No.

さらに重要なことは、オーバー・コミットメントを否定し、自戒したとしても、なお対照言語学者は、次の批判に直面するであろうことである。

「対照言語学の明らかにする因子、すなわち母国語と外国語の構造的相違は『主たる』『もっとも重要な』因子でさえもありえないのではないか？」

3.3. この問題を問い直す前に、ここで、対照言語学がそうであるとされる応用言語学とは何かという基本的な問題を検討しておくことはむだでないであろう。この辞書的定義としてもっとも普通のもは次のものである。

「言語学の一分野で、言語学自体以外の分野または現象に関連ある言語の問題を研究する⁽²⁸⁾学問。」

関連諸科学から情報を受けて、与えられた条件に応じて、自己の外国語教育のための戦略を生み出すのは現場の教師の仕事である。一方、応用言語学である対照言語学の研究者は、母国語と外国語の構造的相違という言語事実と外国語習得という言語活動との関連性という、より抽象的な問題に関心がある。彼は、教師に仮説やその他の情報を送り、実験や実践のデータを受けとる。それによって彼は、分析や検証の方法を再検討したり、仮説を修正したり、ときには放棄したりする。彼の目的は上記の問題の探究以外のものではない。教師にとっては、対照言語学者から受けとる仮説やその他の情報は、彼の受けとるすべての情報の一部にすぎない⁽²⁹⁾。教師は、対照言語学者から受けとったものが、彼の仕事の上で立たないと分かれば、その原因を別段究明することなく、送り返してよい。(ただし彼の仕事が常に改良され、出たところまかせやカンにたよるものにならないため、自己と科学者との間がシステム化されていなければならないが。) もし、このような分業がはっきりしていれば、対照言語学が受ける批判は、テクニカルなものに限られ、ひやかし

2. (1967), p. 130.

(28) 大塚高信編「新英文法辞典」, 1970。

(29) 今日の事実から言えば、ごくわずかと言ってよいのだが。

(30) 応用言語学と理論言語学の分業については後述する。

的、感情的なものは無くなるはずである。⁽³¹⁾

3.4. 筆者の見るところでは、Fries と Lado が提起し、Kleinyans が検証し、対照言語学者たちが金科玉条としてきた仮説はあまりにもおおざっぱすぎ、修正の要がある。次にこの問題をとり扱った A. Afolayan の論文⁽³²⁾を見てみよう。

彼は、対照言語学的アプローチに、二つのタイプがあるという。一つは(本論文で検討してきたような)古典的なもので、もう一つは、F. R. Palmer が次のように示唆しているところのものである。

「私は、多くの人のように、英語とアフリカやアジアの言語を比較することに賛成できない。なぜなら、それらは比較できそうではないからだ。しかし、アフリカ人やアジア人が英語を習得することから結果する一種の英語を記述することができるということは重要である。われわれは、西アフリカ英語とかシャム英語とかいうものを記述できるべきだし、すすんでするべきである」⁽³³⁾

これは、古典的アプローチが、たとえば日本人の英語使用上の誤りを、母国語の影響による標準英語からの逸脱としてとらえるのに対して、そうした逸脱も含めて、日本人によって使用される英語を、英語の一変異体として記述し、しかるのちに、学習対象である標準英語との異なりを明らかにするというものである。

Afolayan によれば、古典的アプローチには次の欠点があった。

- i) 母国語の干渉による誤りとよらない誤りとの区別があいまいである。
- ii) 言語外の因子を言語内の因子と有効に関連づけてとり扱えない。

(31) その例については、Robert P. Stockwell, "Contrastive Analysis and Lapsed Time," in Alatis *Report* および Carl James の先掲の論文を参照されたい。

(32) "Contrastive Linguistics and the Teaching of English as a Second or Foreign Language," *English Language Teaching*, Vol. XXV, No. 5. (1971), pp. 220-9.

(33) "Contemporary English Language and General Linguistics," in H. G. Wayment, ed. *English Teaching Abroad and the British Universities*, p. 32. (引用は Afolayan の論文から)

iii) 構造上の相違をランクづけしていない。

iv) たとえば、ヨルバ（ナイジェリアの言語）の話者が英語を学ぶ場合と、英語国民がヨルバ語を学ぶ場合との区別がふつう行なわれていない。

一方、さらに Afolayan によれば、Palmer 流のアプローチは、上記の欠点をよく補うが、次の限界がある。

v) 英語（目標言語）が日常的に使用されていない場合は記述が不可能。⁽³⁴⁾

vi) 標準英語からのネガティブな異なりが十分に反映されない。⁽³⁵⁾

そして、彼は、言語状況に応じて、この二つのアプローチを併用あるいは使いわけすることを提案しているのである。

3.5. この Afolayan の指摘のうち、iii) は特に重要である。これまでの対照言語学に対する批判の主なものは、この点に集まっていると言えるであろう。Afolayan は、2 言語の構造の相違が、まったく違うものより、少し違うものの方が困難度が高いと指摘している。

この点についての筆者の見解を次に述べる。外国語学習者が用いる文法またはそれに類するものとして、少なくとも次の五つがある。i) 母国語の言語能力、ii) 母国語の学校文法、iii) 外国語の学校文法、iv) それまでに獲得された外国語の言語能力、v) 素朴な言語構造観。このうち、ここでは、まず v)、続いて iii) を検討したい。

どんな未開人でも、自分たちの発話が外国人に通じないと分かると、1 語 1 語区切って発話してみせると言われる。また、幼児が、犬に「おすわり」と言ったが、犬が言うことを聞かないので「お・す・わ・り」と 1 音節ずつ区切って発音してみせたという話もどこかで読んだことがある。これらは、人間は、言語の構造について、知識として与えられなくても、内省によって何らかの考えを持っていることを示している。外国語の学習・使用に当たっ

(34) 記述の前提となる、「等質的な言語社会」(Noam Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax*, p. 3) が存在しないからである。この問題については、のちに触れる機会がある。

(35) たとえば、ヨルバ人が、英語の命令文を使用しない、といったことである。

ては、このような素朴な言語構造観を基にして、論理作用によって外国語を発話したり理解したりする部分があるものと考えられる。

たとえば、ひとは、母国語と外国語の違いについて次のように考える。

i) 意味は同じであるがそれを指示する単語が違う。

ii) 単語の並べ方が違う。

これは、いわば母国語と外国語の関係を母国語とその暗号による表現のよう
に考える考え方である。したがって、ひとは、外国語を習得するためには、
まず単語を習得することに、もっとも熱心になる。そして「並べ方」が違う
ことは承知しているから、たとえば、日本人の生徒が次のような誤りをする
ことはあまりないのである。

ネコハ・イヌガ・キライダ。

***Cats dogs dislike.**

日本語と英語では、(少なくとも表層上の) 文の要素の配列の違いは非常に
大きい。日本人の学習者は、日本語の構造をそのまま英語に移そうとせず、
英語の学校文法によって英語の「並べ方」を学ぼうとする態度を積極的にと
るのである。

しかし、ひとは、単語は意味をのみ、になっていると考えがちだが、実は、
「並べられ方」に関するさまざまな制約をも、になっているものである。も
っとも、単語に品詞の別があったり、活用があったりすること位は気づいて
いることが多い。しかし、この種の制約は想像以上に複雑であり、単語ごと
にあるのだから無数に近く記憶を要求されるので、このレベルの誤りは多く、
困難度は高いのである。すなわち一般に *syntactical-lexical interference* と
言われるものである。例えば、日本人の学習者は、*pleasant* という語は、日本
語の「楽しい」に相当する単語であると考え。これは、ある程度正しくて、
次の例においては確かに対応している。

「その劇は楽しかった。」

The play was pleasant.

しかし次の例ではそうでない。

「私は楽しい (気分だ)」

*I am pleasant.

これは pleasant という語が持っている統語的な制約が、「楽しい」のそれと違うことからきていると思われる。⁽³⁶⁾

次に iii) の外国語の学校文法の影響の場合に簡単に触れよう。これは学校文法が現実の言語構造を反映していないときに起こる。筆者は、かつて、日本の英語の学校文法は、伝統的規範文法の影響を受けて、分詞構文の取り扱いに問題があり、このため日本人の作文にその影響があらわれている事を指摘した。⁽³⁷⁾

一方、いわゆる古典的アプローチにおいては、こうした考慮は払われていない。もっとも Carl James 流に言えば、対照言語学は、言語以外の因子は考慮に入れないということになるのかも知れないが、そのような考え方は、後述のように、対照言語学の領域を矮少化してしまうおそれが多分にあるのである。[(I)おわり, 1972年9月20日]

(付記：(II)においては、対照言語学における比較の妥当性・可能性の吟味、提案されている諸モデルの検討、言語理論との関係の検討などを行う。)

(36) もっとも、言語理論的に言えば、こうしたものは、syntacticalであるか、lexicalであるかのどちらかとして説明されるかも知れない。しかし、syntactical-lexical といった把握の方が、外国語を学習するときの、ひとの用いる論理操作能力に合っているとも考えられる。たとえば、A. S. Hornby の形容詞型の実用度を考えよ。

(37) 「述語動詞に先行する分詞構文」六甲英語学研究会口頭発表 (1968年12月21日)。論文としては近く発表予定。